

# 正男さんの井戸

東京女子高等師範學校教諭兼教授

石井庄司

## 一

今年の夏は仲々の日照つゞきである。關西から西の地方が殊に甚だしいさいふこまである。中國地方の或る町では水道は減水、電燈も薄暗がりさいふ心細い有様ださいふこを聞いた。かういふ早魃の年には水のこまが思はれる。わけても美しい清水の湧く田舎のこまなご、昔のこまが思ひ出される。

自分の生れた隣村に、如何なる旱天にも水の涸れたこまのないさいふ清水の湧く井戸があつた。小さい丘の麓で、あまり水の湧きさうでない場所であるが、非常によい水が滾々ミ湧く。それは大昔、村では水がなくて困つてゐたら、そこへ弘法大師様がお出になり、杖をお突きになるミジューツミ水が湧いてきて、そこを掘つたのであるこま。今でもお團子を作るに、此の井戸の水を用ひるミ大變きれいに出來上るこのこまである。

かういふ昔のこまをなつかしく思ひ起しながら、例の風土記を繰りひろげてゐるミ、播磨風土記の中に「又以杖刺地即從杖處寒泉湧出遂通南北、北寒南暖」さいふ記事が見付かつた。餘りよく似た話なので全く驚かされた。假名交りに書き下してみるミ左の通りミなる。

また杖もて地つちに刺さししかば、やがて杖の處より寒泉しみづ湧き出でて遂に南北かきに通へり。北は寒く南は温し。

話の要點は、杖を以て地面に突きさしたら、そこから清水が湧いた。そして南北に流れた。北に流れる水は寒く南側のは温いさいふのである。原文に「又」ミあるのは、實は此の條は、外來人である天の日槍ひぼこの命に關するこまで、此の前に揖保いひほの丘の所謂があり、それに續いてゐるのである。それで杖もて地に刺すさいふのは、天の日槍の命に關するこまのやうである。風土記では次に出水いづみの里の記事があり、なほ水無川の水争ひの事なきが出てゐる。

一體に風土記には、泉、清水、井に關する記述が多い。それは飲料水といふものが人間の生活に最も密接な關係を持つてゐたからであらう。なほ井戸を中心とする社會的の事件も多かつたやうであり、かたゞ上代人にまつては泉は生活に親しみ深いものであつたであらう。

同じ播磨風土記の中で「酒の泉」おほたけといふのがある。大帯おほたけ日子天皇(景行天皇)の御世に酒の泉が湧き出でた。それで酒山ひこといふ。一般の人々で飲む者は、すぐに酔うて相鬪ひ相亂れた。それで埋め塞がしめられた。後、庚午の年に或る人が掘り出したといふ。今なほ酒の氣があるといふ。

かういふ記事で、かの養老の灌のやうな興味あるものではないが、酒の泉といふものがあつたことがわかる。民衆は爲めに亂鬪を演じた。因つて之を埋めさせられたといふあたりは一種の親しみもあつて、面白い記事と思ふ。最も子供向の話には不似合であることは、申すまでもない。

さて、都會生活をしてゐる子供、井戸といふものゝ難有味を知らず、水の重寶さを知らず、水道の栓さへひねれば水は出るものゝ心得てゐるものに、かういふ昔の話はさうしたら聽かせ得るであらうか。

正男さんは、今年の夏休に、お父様おとうさまと一所にお父様のお國へ連れて行つて戴きました。特急ツバメ號に乗つて、朝九時に東京を出發しましたが、お父様のお國へ着いたのは、もう夕方でした。

「正男さん、ようく來ましたね。さあ、さあ、おいしい西瓜が冷してありますから」おとうさまやお婆様おばあさまに迎へられて、正男さんは、眼をバチクリさせてゐます。

薄暗い電燈の下で、正男さんはお父様おとうさまと一所においしい西瓜を戴きました。電燈は暗いし、蚊はブンブンうなつて來るし、いやでしたが、西瓜は本當においしく、顎あごが落ちさうでした。

「田舎の電燈つて暗いんですね」

とお父様にきいてみた。するこ

「いや、いつもは東京と同じに明るいのだが、今年は雨が降らなくて、水が無いので、電力がなくて、こんな暗いのだよ」

と教へて下さつた。

その晩は汽車で疲れたので早くおやすみました。

翌くる朝起きて、正男さんは顔を洗はうと思ひましたが、何處にも洗ふところがありません。

「お父様、水道はここにあるの」

さき々ましたので、お父様は大笑をなさいました。

「正男さん、それでは田舎の水道を教へてやらう」

「お父様にいはれて、下駄をはいて行きますさ、御門を出て、坂を上つて、すつさ向ふの杉の森まで来ました。

「これが田舎の水道さ」

「さ笑ひながら、お父様は正男さんに井戸をお示しになりました。山の麓の岩の崖に、石で圍んであつて、木の葉が落ち込まぬやう蓋が造つてあります。のぞいてみますさ、中に澄んだ水がたまつてゐます。

「いつもなら、もつさ澤山水があつて、この出口からチロ／＼流れるくらゐなのだ、今年は雨が降らないから、もう水が無くなりさうだ」

さいつて、お父様は大事に一杯の水をお汲みになりました。それを二人でわけて顔を洗ひました。それからお父様は

「お家で御飯を炊く水も、お茶を飲む水もみなこゝまで汲みに來るのですよ」

「お教へて下さいました。正男さんは、はじめて水さいふものがこんな大事なものかと思ひました。

正男さんは、お父様ご一所に此の田舎の家で楽しく暮してゐましたが、幾日たつても雨が降りません。あちらでもこちらでも雨がほしい、雨が降つてくれればさいふ聲がします。田圃の水はもうすつかりなくなつて、稲の葉はよれ／＼に萎なえてゐます。畠の土も眞白に乾いてゐます。川の水もなくなりました。いまに村の人の飲む井戸の水もなくなつてしまふだらうさみな心配してゐます。村の人は、毎晩鎮守様に集つて、お祈りをいたしました。正男さんもお父様ご一所に行つてみました。

村の人々は多勢集つて、神様の前にお燈明をあげ、一生懸命に、「さうか雨を降らせて下さい」さおがんでゐます。正男さんも小さい手を合はせておがみました。さうかして雨が降りますやうにさ心に念じました。

お父様ご一所に、鎮守の森の薄暗い道を戻つてきますさ、向ふの方に何かぼうつさ明るいものが見えます。何だらうさ思つてお父様ご一所に近づいて行きますさ、髭の白いお爺さんでした。着てゐるものも眞白なもので、手には長い杖を持つてゐます。髭のお爺さんは正男さんの顔を見るとき、ニコ／＼さ笑ひながら長い杖で、コツ、コツ、コツさ三度地面を突きました。何だらうさ驚いてゐる中に、そ

のお爺さんはすうまごこかへ姿を消してしまひました。

翌くる朝早く、正男さんはお父様と一所に鎮守様へお詣りいたしました。そしてゆふべお爺さんに出逢つたことなごを話してゐますご、今まで何もなかつた道のわきにきれいな清水が湧いてゐるではありませんか。よく見るご、杖で突いた跡があります。

「これはきつご、あのお爺さんが教へてくれた清水だ」  
ご大よろこび。水はいくらでもごんご湧いてきます。

そこで村の人を呼び集めて、大勢で掘りひろげました。

「もうこれで御飯を炊く水は心配ない。正男さんありがたう」

ご村の人はみんな御禮をいひました。それからその井戸を「正男さんの井戸」といふやうになりました。

## 今夏保育講習會

今夏に於ける本會主催の保育講習會は、豫期以上の盛會裡に終りました。北は北海道より、臺灣、朝鮮、滿洲よりも多數參會せられ、實に全國的な會合でありました。(參會者五百六十餘名)講習會員の方は汗したたる炎熱をものごもせず皆熱心に聽講せられました態度は、係員一同感激の他ごさいませんでした。

本會主催のごほど時日を同じうして東京に於て開かれた保育講習會に、佛教保育協會主催の講習會、帝都保姆傳習所主催の講習會、保育問題研究會主催の講習會なごあり、これより多少の時日をおくれて開催せられたものに、東京昭和保姆養成所主催の講習會なごありましたが、何れの講習會も超滿員の盛況でありました由に聞いて居ります。

今年は文部省よりの通牒もあり、集團勤務作業は全國の學校に於て實施致されて居りますので、全國からの皆様が多數一堂に會されるごは六ヶ數からうご考へて居りましたのに、かくも盛會であつたご云ふごは畢竟するに保育實際家の熱心を示すものだご思ひました。この時局にじつごしては居られない。多少なりごも勉強して御奉公致さんものごの御心構へのあらはれだご感じた次第でした。

(講習會係り)